あいち朝日遺跡ミュージアムへ おでかけの方にお得なお知らせ

2施設来場でお得な「共通チケット」のごあんない

弥生時代 あいち朝日遺跡ミュージアム

観覧料
常設展も観覧できます

区分	一般	大学生・高校生（学生証のご提示が必要です）
個人	300円	200円
団体（有料20名以上）	250円	150円

※学校行事（高校以下）及びその引率者、中学生以下、障がい者の方及びその付き添いの方（1名まで）は無料

- 愛知県清須市朝日貝塚1番地
- TEL／052-409-1467
- 開館時間／9：30～17：00
- 駐車場／15台
- 休館日／月曜日（祝休日の場合は翌平日）及び年末年始（12/28～1/3）

戦国時代 清洲城

※あいち朝日遺跡ミュージアムから清洲城まで徒歩約10分

入館料
【大人】300円
【小人】150円（小中学生）※幼児無料

- 愛知県清須市朝日城屋敷1－1
- TEL／052-409-7330
- 開館時間／9：00～16：30
- 休館日／月曜日

※月曜日が祝日・振替休日の場合は、翌平日

あいち朝日遺跡ミュージアム 清洲城 共通チケット
2施設で計600円を 500円 発券より半年間有効

古墳時代 体感！しだみ古墳群ミュージアム

展示室入館料
【一般】200円
※中学生以下無料

- 名古屋市守山区大字上志段味字前山1367
- TEL／052-739-0520
- 開館時間／9：00～17：00
- 休館日／月曜日

※月曜日が祝日・振替休日の場合は、翌平日

あいち朝日遺跡ミュージアム 体感！しだみ古墳群ミュージアム 共通チケット
2施設で計500円を 400円 発券より半年間有効

大学生 高校生 2施設で計400円を 300円

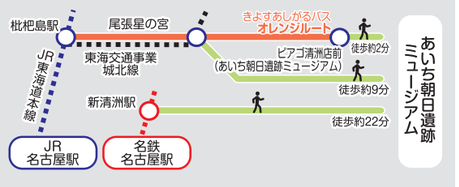
共通チケットは、各施設の窓口でご購入いただけます。

AICHI ASAHI SITE MUSEUM

あいち朝日遺跡ミュージアム

■ 愛知県清須市朝日貝塚1番地 ■ TEL：052-409-1467 ■ 駐車場 15 台

公共交通機関



クルマ

名古屋第二環状自動車道「清洲東IC」から約1分
清洲公園駐車場もご利用いただけます。
駐車場の数には限りがあります。出来る限り公共交通機関のご利用をおすすめします。

https://aichi-asahi.jp/ SNSもご覧ください

朝日遺跡だより vol.11 令和5年12月発行 発行・編集：あいち朝日遺跡ミュージアム
〒452-0932 愛知県清須市朝日貝塚1番地 TEL 052-409-1467

あいち朝日遺跡ミュージアムの今を伝える情報誌【季刊誌】

朝日遺跡だより

2023年12月 vol.11

振り返りレポート／
企画展「弥生農耕ことはじめ ー出土した農具から探るー」
弥生ムラづくりプロジェクトレポート
シリーズ／ミュージアム収蔵品ファイル
アカとクロがレポートするミュージアムの見所
連載／ミュージアムスタッフのこぼれ話
ショップグッズ紹介
古代体験プログラムのお知らせ
9月～11月のできごと
企画展「あいちの発掘調査2023」
開催のお知らせ

あいち朝日遺跡ミュージアム

企画展開催風景

各地の収穫具

彩文土器:菜畑遺跡(唐津市指定文化財・唐津市教育委員会蔵)

企画展振り返りレポート

企画展 弥生農耕ことはじめ
―出土した農具から探る―

期間 2023年10月21日(土)～12月17日(日)
場所 あいち朝日遺跡ミュージアム本館・企画展示室

はじめに

弥生時代には、農耕が始まり、様々な農具が普及していきました。収穫に用いられた石包丁、脱穀(だっこく)や籾摺(もみす)りに用いられた杵や臼は、農耕とともに大陸からもたらされた新しい道具でした。一方、大型石包丁のように、その役割がはっきりと説明されていない道具もあり、現在も研究が進められています。

今回の企画展では、九州から中部地方で出土した、収穫・調製(脱穀、籾摺りなど)に用いられた農具を取り上げ、弥生時代の人々がどのようにコメを収穫し、どのように保管・加工していたのか、弥生時代の農耕技術について考える展示として企画しました。

展示の概要

展示の構成は次のとおりです。

Ⅰ 農具から探る

最初にあいち朝日遺跡ミュージアム基本展示室の復元模型「農地での作業」の中から、本展示に関係する収穫、脱穀・籾摺り等の調整、藁(わら)の利用などの場面を取り上げ、展示品と農作業が対応していることを示しました。

Ⅱ 収穫の道具

弥生時代の収穫具としてよく知られている石包丁をはじめ、大型石包丁、石鎌などの石製収穫具を九州、瀬戸内、近畿、東海、中部高地の資料を取り上げ、それぞれの地域色も織り込みながら紹介しました。また、石だけでなく木製、鉄製の収穫具も取り上げました。

Ⅲ 調整の道具

収穫された米は、乾燥・脱穀・籾摺りなどの調製作業を経て、調理されます。脱穀・籾摺りの道具として竪杵(たてぎね)、臼(うす)を展示で紹介しました。

Ⅳ 藁利用の可能性

弥生時代に稲藁は利用されていたのか、実はあまりよく分かっていません。本企画展では、出土品の横槌(よこづち)と民具の藁打ち具を取り上げ、考古学的な状況証拠からその可能性を提起しました。

Ⅴ 蓄える

米などの貯蔵として、佐賀県唐津市指定文化財の彩文土器や大阪府茨木市の高床建物が描かれた弥生土器など、貴重な資料を紹介することができました。

最新の研究を紹介

本企画展では新しい試みとして、本ミュージアムも参加している「水田稲作技術比較研究プロジェクト」(代表:東京都立大学山田昌久特任教授)と取り組んでいる体験水田での米づくりの様子を紹介するとともに、日本各地の復元水田や実験水田で行われている弥生稲作技術の解明に向けた実験的な取り組みを紹介するポスター展示も行いました。

また、会期中には、研究プロジェクトと連携して、講演会、シンポジウムなどの最新の学術的成果を紹介する事業も開催しました。

稲作を体験する

企画展の会期中には、体験水田での収穫体験(10月21日)、体感!しだみ古墳群ミュージアムとの連携講座「稲作の歴史とおコメを美味しく食べる!」(10月29日)、季節イベントでの「脱穀体験」(11月18日)など、展示の内容を実際に体験する事業を開催しました。古代体験プログラムの月替わりメニューとして10月に実施した「ミニチュア石包丁づくり」はたいへん人気で定員を超える日もありました。

弥生時代に始まった日本の農耕文化は、世代を超えて受け継がれ、現在の私たちの社会・文化を形作っています。その歴史を展示や体験を通して感じていただけたなら、有意義な企画展であったと思います。

最後に本企画展の開催にあたり、ご協力いただきました所蔵機関をはじめ、関係者、関係機関に厚くお礼を申し上げます。

(原田　幹)

藁たたき槌と藁たたき石:民具(奥三河郷土館蔵)

竪杵・臼の展示

企画展ポスター

弥生ムラづくりプロジェクト レポート

体験水田での稲作をとおして、弥生時代を体験する「弥生ムラづくりプロジェクト」。この秋は、石包丁づくりから収穫、脱穀までを体験しました。

石包丁づくり

2023年9月23日(土・祝)

弥生時代の稲刈りで使う収穫具「石包丁」。その石包丁の歴史や、弥生時代にどう使っていたかの話を聞いた後、実際に石をレンガで磨いて、石包丁を作りました。参加者の皆さんは、一生懸命に思い思いの石包丁を製作していました。

収穫体験

2023年10月21日(土)

弥生時代の衣装である貫頭衣(かんとうい)を着て、体験水田に実った稲穂を石包丁で摘み取る収穫体験を行いました。石包丁で稲の穂をおさえ、1本ずつ摘み取っていきます。普段使うことのない石包丁の使い心地を実際に体験することができました。

脱穀体験

2023年11月18日(土)

「脱穀」とは、収穫した稲の茎から籾(もみ)をおとす作業のことです。復元した竪杵と臼を使って、10月に収穫した稲の脱穀体験を行いました。他にも「千歯扱(せんばこ)き」や「足踏み式脱穀機」も体験。それぞれの脱穀方法を比べながら、道具の歴史を体験しました。

シリーズ　ミュージアム収蔵品ファイル No.10

石包丁・大型石包丁

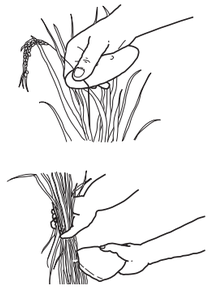
石包丁は扁平な石器で、長い方の一辺に刃が付けられています。「包丁」と呼ばれていますが、調理用の包丁ではなく、イネなどの穀物の穂を収穫するために用いられた収穫具です。中国の新石器時代に出現し、弥生時代早期に日本列島に伝えられました。弥生時代を通して、九州から東北まで広くみられますが、その形や使われる石材には地域色があります。

大型石包丁は、石包丁を大きくしたような石器ですが、石包丁に比べ刃が薄く鋭く作られています。石包丁と同様に九州から東北まで広く分布します。刃だけ研いだもの、打製の刃器などと合わせ、「大型直縁刃石器」とも呼ばれています。

石包丁は、孔に紐を通して輪を作り、この輪を手にかけて使います。親指で稲穂の下の茎を石器の平らな面に押さえ、刃を上に持ち上げるように動かし、穂を1本ずつ摘み取るように使いました。一方、大型石包丁は、薄く鋭い刃を平行にスライドさせ、引き切るように使用しました。稲株のように厚みのある部分を刈り取るのに適しており、稲穂を収穫した後の稲株の刈り取りや除草に用いられた道具と考えられています。

（原田　幹）

石包丁：朝日遺跡（重要文化財・本館蔵）



石包丁（上）と大型石包丁（下）の使用方法

大型石包丁：朝日遺跡（重要文化財・本館蔵）

収穫の風景（あいち朝日遺跡ミュージアム復元模型）

9月～11月のできごと❶

イベント

「朝日遺跡弥生ウィーク」

●日時：2023年11月21日（火）～11月27日（月）
●場所：あいち朝日遺跡ミュージアム　本館・研修室
●内容：「あいち県民の日（11/27）」を含む1週間を「あいちウィーク」と定め、愛知県内の施設で様々なイベントを開催しました。ミュージアムではウィーク期間中、「勾玉アクセサリーづくり」「土器拓本づくり」を開催し、来館者のみなさまに弥生時代や考古に楽しく触れていただきました。

「勾玉アクセサリーづくり」で用いた素焼きの勾玉はミュージアムスタッフの手作りで、同じ形の勾玉は一つとしてありません。参加者のみなさまには1,000個以上ある勾玉の中からお気に入りの勾玉を探してアクセサリーを作っていただきました。

「土器拓本づくり」では、出土した本物の弥生土器の文様を紙に写しました。写した拓本はラミネート加工を施して栞としても使えるカードにしてお持ち帰りいただきました。土器片の文様をじっくり観察し、丁寧に紙にインクを乗せて拓本をとる姿は、調査研究員のよう。小さなお子様も大人の方も真剣な表情で拓本をとられていました。

土器拓本づくり

勾玉アクセサリーづくり

朝日遺跡マスコットキャラクター
「アカ」　「クロ」

アカとクロがレポートする
学芸員に聞こう!

ミュージアムの見所（総集編①）

今回も朝日遺跡に詳しい学芸員の方に話を聞きました

（大國　磨実）

これまでミュージアムの屋外の見所をレポートしてきたね。
どんな見所があったのか振り返ってみよう。

竪穴住居・高床倉庫

地面を掘り下げてつくられた半地下式の住居を竪穴住居といいます。発掘調査では、この竪穴と床面に掘られた柱穴や炉跡などがみつかりました。半地下式のつくりのため、比較的夏は涼しく、冬は暖かいという利点がある一方で、屋内に炉があるため火事になりやすいといった弱点もあります。

高床倉庫は弥生時代に広まった建物で、地面に直接柱を立て、床が高くつくられているのが特徴です。地面を掘り下げて建てられた竪穴住居と異なり、床を高くすることで風通しがよくなり、中身を湿気から守ることができた点や、密閉されているためネズミ等の侵入を防ぐことができたという点から、収穫したイネなどの穀物を蓄えるための建物だと考えられています。

竪穴住居・高床倉庫

体験水田

体験水田

弥生時代の水田をモデルとした体験水田では、お米づくりを体験できます。朝日遺跡では、確実な弥生時代の水田はまだみつかっていませんが、炭化したお米や鍬や石包丁などの農具は出土しているので、お米づくりをしていたことは確かです。稲作が始まった頃のお米には多くの種類があり、現代では品種改良が進み、味が良く栽培しやすいお米が大量に作られています。体験水田では、緑米や赤米、現代の「あいちのかおり」を栽培しています。

赤米は、品種改良が盛んになるまで各地で栽培されており、現在も種子島等で神事用に栽培されています。白米に比べビタミンやミネラルなどを多く含み、豊富な栄養価を含んでいるそうです。

貝層、貝塚

体験水田の近くの壁には、環濠を調査したときの地層の写真を展示しています。この写真を観察すると、貝殻がたくさん重なっていることがわかります。このように貝殻がまとまって出土する場所のことを貝塚といいます。

朝日遺跡の貝塚からは、ハマグリやカキ、シジミなどの貝殻がみつかっています。現在は海から遠く離れていますが、弥生時代は、海岸が近かったようです。復元された環濠の中やミュージアムの東側の貝層平面表示には、発掘調査で出土した本物の貝殻を使っていますよ。

貝殻にはカルシウムが多く含まれているため、土器や石器の他にも、普通は土に埋まると腐って無くなってしまう骨や角でつくられた製品、動物・魚の骨なども残されており、弥生時代の生活を知るための貴重な情報が得られます。

貝層、貝塚

ミュージアムの見所を巡ってみよう！

連載（シリーズ11）

ミュージアムスタッフのこぼれ話

資料借用の強い味方

学芸員の田中です。あいち朝日遺跡ミュージアムでは、1年に4回企画展を開催しています。約2ヶ月間の企画展開催期間中は、他館が所蔵する貴重な文化財を当館でご覧いただける、またとない機会となっています。

さて、それではこれらの企画展用にお借りする資料は、どうやってあいち朝日遺跡ミュージアムまで運んでくるのでしょう？実は今までの企画展では全て、専用のトラック（美術品専用車、通称“美専車”）に乗せて陸路で運んでいます。文化財輸送の専門部局を持つ輸送業者から、運転手・専門資格をもつ作業員と共に美専車を数日間チャーターし、お借りする資料を所蔵する各施設を回って集荷してくるのです。

もちろん、所蔵館の所在地が遠方であるほど集荷には時間がかかります。2023年末現在、当館で資料を借用したことがある最も遠方の施設は佐賀県唐津市の末盧（まつろ）館ですが、直線距離で約800km離れています。愛知県に戻る途中で他施設にも伺いますし、美専車の運転は昼間のみ・安全第一・速度遵守ですから、片道3～4日ほどの旅程になります。

この借用資料輸送の美専車には担当学芸員も同乗します。資料借用時の手続きや、万一のトラブル発生時の対応をするためです。そして当然のことながら、企画展終了後の返却時も同じ距離を美専車で移動することになります。幸い私は乗り物酔いを全くしない上、学生時代に福岡～新宿便夜行バスに何回も乗っていたので、九州まで往復の旅も苦にならなかったのですが、酔いやすい方には苦行かもしれません。

（田中　恵美）

「北陸の弥生文化」展の資料返却時の様子（2022年12月）。

SA駐車中の美専車（写真中央、左から8台目のトラック）。
右は関門橋。

ショップグッズ蘊蓄（うんちく）紹介【ろう石勾玉づくりセット】

ろう石勾玉づくりセット
¥500（税込）

ろう石勾玉体験キットと完成みほん
ろう石、紐、紙やすり(3種類)

勾玉は縄文時代から作られてきた装身具で、「曲がった玉」がその語源とされています。形の起源は不明ですが、動物の牙を模したという説や初期の胎児の形を象ったとする説が有力で、それ以外にも、実は「玉＝魂」として、人の心の形を現したものとする考え方もあります。

人の魂は、安定しているときは、「球」のようにまろやかですが、不安定なときは「人魂」のように漂う存在のようです。若しそうだとすれば、勾玉の形は、尾を引くほどに躍動している心の形を表現しているということでしょうか。

このセットは、天然の蝋（ろう）石を、紙やすりで削って形を整え、丁寧に磨いて勾玉のペンダントに仕上げるものです。自分へのご褒美や、心がときめく大切な人への贈り物を手作りしてみませんか。

古代体験プログラムのお知らせ　土・日・祝開催　会場：本館・体験学習室

1月
教材費 50円　各回先着 10人　時間 15:00～(60分)

アンギン編みでコースターづくり

古代の編み方でコースターを作ります。

作例

2月
教材費 700円　各回先着 10人　時間 15:00～(60分)

土人形づくり

オーブン陶土を使って土人形を作ります。
ミュージアムで焼成まで行い、展示をします。

作例

3月
教材費 700円　各回先着 10人　時間 15:00～(60分)

赤彩土器づくり

赤色や黒色の塗料を使って「赤彩土器」を作ります。

作例

※2024年1月6日(土)から3月31日(日)までの土・日・祝日に開催(各日1回)　※当日ミュージアム本館窓口にてお申込みください。(事前予約はできません)
※イベント開催日は、通常と異なるメニューを実施する場合があります。

9月～11月のできごと❷

イベント

「勾玉アクセサリーづくり」

●日時：2023年11月11日（土）
●場所：あいち朝日遺跡ミュージアム　本館・研修室
●内容：清洲城信長まつりの関連事業として、オーブン陶土で作成した勾玉などを組み合わせて、自分だけの首飾りをつくる「勾玉アクセサリーづくり」を開催いたしました。簡単に作れることから、小さなお子様を中心に多くのお客様に好評をいただきました。

「収穫祭」

●日時：2023年11月18日（土）
●場所：あいち朝日遺跡ミュージアム
●内容：ミュージアムの体験水田で収穫した稲穂からお米を取り出す「脱穀体験」や朝日遺跡の発掘調査で出土した本物の弥生土器片を接合する「リアル・土器パズル」など、収穫祭ならではのイベントを多く実施し、多くの方に楽しんでいただきました。

講座ヒストリーカフェ

「ご飯のおかずは魚！」

●日時：2023年9月10日（日）
●場所：あいち朝日遺跡ミュージアム　本館・研修室
●内容：古代の人々は魚をどのように食べていたのか。企画展「弥生人といきもの2023魚をとろう！」の展示資料や奈良時代の文字資料などを参考に、日本の魚食について文化的な側面からお話しました。

「収穫具、引いて切るか押して切るか」

●日時：2023年11月4日（土）
●場所：あいち朝日遺跡ミュージアム　本館・研修室
●内容：東アジアの伝統的な収穫具には、刃を体の方に引き起こすように切るものと刃を前方に押し出して切るものの2つの使用法が見られます。収穫具の形と使い方の違いについて、中国、朝鮮半島、日本の考古資料、そして東南アジアの民具を比較しながら、お話をしました。

企画展　「あいちの発掘調査2023」開催のお知らせ

会期：2024年1月20日（土）～3月10日（日）

愛知県内では、毎年多くの遺跡で県や市町村等による発掘調査が行われており、貴重な発見が相次いでいます。

今回も昨年度に引き続き、県内各地で実施された最新の発掘調査による出土品や調査成果を紹介するとともに、学識経験者を招いた講演会や、展示で紹介する遺跡の調査担当者による報告会などを開催し、県内の考古学の最新情報を分かりやすくお伝えします。